

追悼のことば

雑誌名	鹿児島大学法学論集
巻	52
号	1
ページ	1-1
発行年	2017-11
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029940

追悼のことば

相浦聡先生は、定年でのご退職を目前に控えた本年2月23日にご逝去されました。鹿児島大学法文学部法経社会学科法学コース担当の教職員を代表して、謹んで哀悼の意を表しますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

相浦聡先生は、昭和52年（1977年）4月に京都大学大学院文学研究科博士課程にご進学直後の同年5月に鹿児島大学教養部に助手として採用されました。その後、昭和53年（1978年）10月に講師にご昇任、そして、昭和60年（1985年）4月に助教授に昇任され、40年もの長きにわたり本学の教員として教育研究に携わってこられました。平成9年（1997年）に本学教養部が廃止されたことに伴い、法文学部に移籍されましたが、ご在職中は、共通教育において、ご専門のドイツ語の教鞭を執られるだけでなく、法文学部の専門科目としての社会文化論などの科目もご担当いただき、法学・政治学を学ぶ学生の基礎教育にも多大なるご貢献をいただきました。また、学内行政の面でも、学部教務委員長、学部入試実施委員、学科教務委員などの要職を歴任され、管理運営の面でも、文字通り、学部の柱となって支えていただきました。

教員としての相浦先生は、何よりも学生のことを第一に考えてくださり、いかなる時も懇切丁寧にご指導される先生でした。教育者として、すべての学生に対して、惜しみない愛情を注いでこられました。かつての教養部時代には、試験で不合格になった学生に対して、必要最低限の能力が身につくまで繰り返し試験を行ってくださったそうです。もちろん、法文学部に移籍された後も、こうした懇切丁寧なご指導は続きました。ドイツ語の基礎から応用までを学生に丁寧にご指導いただきましたことにより、ドイツのミュンヘン大学において1年間法律学を学ぶことができるような学生も育てていただきました。また、ご研究の面では、「Chr. M. Wielandの『黄金の鏡』について」、「オペラ『魔笛』の台本解釈をめぐって-18世紀の文脈の中で-」など、政治小説を含むドイツ文学作品に関する論文を発表されました。これらのご研究成果は、単に文学にとどまらない、相浦先生の関心の幅広さや学識の高さを表すものといえます。

相浦先生は、教育、学内管理業務、ご研究において、直面する諸課題に対して、ご実直に向き合われ、そのすべてをよき方向へと導いてくださいました。そして、誰に対しても分け隔てなく、相手の立場に立って、思いやりの心をもって接して下さる人格高潔な先生でした。そのような先生とこんなにも早くお別れしなければならないことが残念でなりません。これまで先生が本学において残された数多くのご功績に感謝しつつ、在りし日の相浦先生のお姿を鑑にして、私たちはこれからの教育研究に励んで参りたいと思います。

相浦聡先生の御霊に、謹んでこの法学論集を捧げます。

平成29年11月

鹿児島大学法文学部法経社会学科
法学コース長 松田忠大